

## 古典テキストに親しみ、関心を広げたり深めたりする学び 「朗読」と「協働型学習」をつなぐ「フリップ」と「マネ朗読」

新潟大学附属長岡中学校 佐藤 敦

### 一 はじめに

本実践は、「新学習指導要領・生きる力Q & A」で述べられた、以下の二点を重視した授業実践（中1）である。

- （1）生徒が古典に一層親しめるようにすること。
  - （2）我が国に長く伝わる言語文化について、関心を広げたり深めたりすること。
- これを受け、以下の二つの学習活動を構成した。

（1）積極的・主体的な学習参加をねらい、「Output」の活動（音読・朗読）を取り入れる。

（2）多様な意見を取り入れながら読解を深め、広げることをねらい、「協働型学習」を取り入れる。

### 二 古典テキストの「協働型学習」

本校国語科では、協働型学習により、「異

なった価値観や文化的背景を持った者同士が交流し、それぞれの読解をさらに深める」ことができる可能性を主張している。

古典テキストには、口承文学の特徴である省略された主語や助詞を補ったり、行間・登場人物の背景を探りながら読んだりする力が必要である。そこに、生徒が一人の力で解釈することの困難さ、生徒相互の想像する場のイメージの違いが生じる。

そこで本実践では、正確な「古語の理解」場のイメージを求める過程に、「協働型学習」を位置づけることとした。（メカニズム例：左上）

まず、「朗読の工夫ポイントを考えること」で各自の理解を明確にする。

その後、「朗読をし合い、アドバイスを送り合うこと」で、多様な理解に触れさせ、新たな視点の獲得をめざす。（読解につなげる。）そして、グループでの「検討会」によって、

古語や場のイメージを正しく理解し、読解を

さらに深めていく学びを構想した。

### 三 「朗読」と「協働」をつなぐ

本授業では「竹取物語」の「昇天」の場面について、朗読の工夫をアドバイスし合うことを通して読解を深める「協働型学習」を組織した。

国語の、特に古典テキストでの「協働型学習」は、「自他の『とらえ』をどう伝え合うか」がポイントとなる。そのため、以下の二つの手だてを講じた。

①朗読時に『フリップ』を出して、自分の理解を視覚的に明示する。

②他者の朗読の工夫をアドバイスする際、試演（「マネ朗読」）して体感し、検討に生かす。



『竹取物語』における「協働型学習」のメカニズム～「昇天」場面での読解の深化をねらった例～

※「昇天」場面をA・B・Cに分割し、個別にその一部分を選んで追求を深め、グループでの「協働」によって読解を統合・深化する。

「協働」前

「昇天」場面を一読し、イメージを描く。(まだ不鮮明)

A 天人が降りてくる部分  
かかるといって、背うち  
すぎに、家のあたりに…

B かぐや姫が文を残す部分  
天人の中に、持たせたる  
箱あり。天の羽衣入れり。またあるは…

C 翁姫が嘆き悲しむ部分  
中持取りつれば、ふと  
天の羽衣うち着せて  
まつりつれば…

「昇天」場面

追求

最も惹かれた部分を選択し、**朗読の工夫ポイント**を考える学習活動を通して、自分の理解を明確化している。

B 天の羽衣  
— 姫は忘れたくない  
— 「しばし待て」  
— 翁を大切に思う

フリップ



「協働型学習」

違う部分を選択した他者との**朗読の発表・アドバイスの**し合いで新たな気づきを得、**検討会**で自分の読解をより深めている。

A  
— 子の時—シンデレラ?  
— 身長の高さで語る天人  
B  
— 不死の薬  
— 人類のあこがれ  
— 心異になり  
— すべて忘れてしまう  
C  
— 翁・姫の愛情  
— ものおもひなくなり  
— 愛は人間だけ?



検討会

「協働」後

追求した部分の読解を基に、他者の読解を取り入れ、全体のイメージをより鮮明に思い描く。

かぐや姫は別れたくないと思っていたが(基となる読解)、天人の圧倒的な力(Aより)によって、泣く泣く天の羽衣を着た。その時、翁のことを考えて不死の薬(Bより)を手渡そうとした。天に帰る姫には、もう記憶がない。(Cより)＝読解の深化

↓九五%の生徒が広がり・深まりを実感した。

自分の担当したAでさえもイメージがぼやけていた部分があったのだが、討論で「五尺はかり高いところにいるのはBの人の「歳き所代」だから」という意見でA全体のイメージがより場面がはきりレ、ABC全部は組み合わせてより場面がはきりする感じがした。

3 「協働型学習」による検討会で、新たな気づきを得たり、自分のイメージをより鮮明にしたりできたか。

↓九五%の生徒が広がり・深まりを実感した。

あまりイメージがわからなかったこそマネ朗読したう、工夫の仕方により、充血するのはないかとイメージができた。それは二人が悲しんだのだと気付けた。

2 「マネ朗読」で新たな気づきを得たり、自分のイメージをより鮮明にしたりすることができたか。

↓一〇〇%の生徒が読解の深化を実感した。

今の自分はどう表したいのねを考えて工夫をするからし、カリビイイメージをもっと考えらした。

1 朗読の工夫ポイントを考えることでイメージは深化するか。

授業後の、生徒に対して行ったアンケートによる検証結果と、感想である。

四 生徒の学びの姿

さとう あつし 平成二十二年度より新潟大学附属長岡中学校に勤務。幼・小・中一貫カリキュラムの作成にあたり、十二年間の学びをつなぐ国語の資質・能力を研究中。

※本実践は、新潟大学教育学部附属長岡中学校研究協議会 国語科(二年二組)の授業実践(平成二十二年十月二十一日)を中心にとめたものである。

このような学習活動により、生徒は古典テキストに、自分の読解をより広げたり深めたりする価値や可能性を見出すことができた。単元後は、「全文を読みたい」「原文を見てみたい」という感想が多く、古典テキストにより一層親しむ学びができたと考えている。

このような学習活動により、生徒は古典テキストに、自分の読解をより広げたり深めたりする価値や可能性を見出すことができた。単元後は、「全文を読みたい」「原文を見てみたい」という感想が多く、古典テキストにより一層親しむ学びができたと考えている。

個人の理解を読解へと深める過程に「協働型学習」を位置づけたことで、多様な気づきが生まれ、読解の幅を広げることができた。また、ある生徒の「月がすごい力を持っている設定は、太陰暦とつながっている」という読解が全体に共有され、多くの生徒が「現代の私たちと当時の人々の生活を比べる」視点から、読解を深めていくことができた。

生徒は「朗読の工夫ポイント」を考えることで、自分の理解を確認する必要性を感じながら、意欲的に学びをスタートさせた。

五 おわりに